

堤尻川と段丘先端を歩く

2004.7.25



胆沢扇状地と真城の段丘



堤尻概要

安永風土記には〈堤尻村として〉

- 村名の由来 往古堤ヶ沢と申所に大堤之有其裾に当有候故・・・
- 戸数 38 軒、人口 186 人、神社 1、寺 1、修験 1
- 古館—堤尻館 代数之有 御百姓 五代相続 1 名
- 古墳 5 つ—大檀 4、男根切檀 1
- 名水—銀錢清水
- 神社—立木八幡神社 約 1225 年経つ胆江地方で一番古い歴史を持つ
- 堤尻館—中世末期、館主は？堤尻興兵衛（柏山氏家来）
- 大檀 4 つ—高さ四尺廻拾間 右安倍貞任御合戦之 戦死之軍兵を相埋メ・・・
社領田もあったと思われます。

—この地区は立木八幡神社を中心に、神社の発展、または戦場にもなりました（塚）

現在の字名

上野、大檀、柿ノ木下、高田、塚、堤尻下、中道、南上野、西五郎兵衛等

堤尻の現状

明治 22 年真城村誕生の時、村役場、小学校、さらに昭和になって中学校、農協等が設置され、村の中心となりました。



堤尻村

堤尻村は、須江村の西側に位置し、堀切段丘に立地しています。

地名の由来は「安永風土記」によると、かつて堤ヶ沢があった大堤の裾に位置していたことによると伝えられています。

堤尻館跡は堤尻集落の裏山の一角にあるとされますが、現在遺構はなにもなく、中心に墓地があり、雑木林に覆われています。

「安永風土記」には、館主は堤尻殿とあり、姓名は知られていません。

明治 8 年（1875）堤尻村は、須江村、上姉体村と合併して秋成村となりました。

給水パイプ

昔、北上川が氾濫する土地であった中野地区は、井戸を掘っても飲み水にはならず、湧き水の多い上野地区からパイプで水を引いていました。中野に住む15戸ほどの人たちが利用組合を作って管理し、真城小学校の飲み水やプール、また真城村役場にもこの水が利用されました。しかし堤尻川の改修工事でパイプは埋められ、今は東北本線の下を流れる川底に、一部が見られるだけになりました。



真城村役場

明治に誕生した村役場は、公民館と合わせて村の中心となっていました。昭和29年(1954)、近隣5町村との合併で水沢市となり、村役場としての使命も終わりました。

その後は真城農協となり、今に残る建物は堤尻地区民の集会所として利用されており、跡地には有志によって石碑が建てられ、その歴史を伝えています。

ここには、堤尻の地名の由来といわれる「堤が沢」があります。

胆沢扇状地の東縁端にあたるこの付近は、森・林・原野で、平泉藤原時代に胆沢川からの取水に失敗したため水の便が悪く、耕作地にはなりません。その為、雨水や湧き水に頼った堤や溜め池が多く造られました。その後、江戸時代になり用水路が完成すると上野の開発が進みました。

堤尻川にも溜め池が造られ、その土手跡がありましたが、これも残念ながら、平成15年(2003)の河川改修工事で形はなくなってしまいました。

段丘に流れる川全てが「沢」の付く名前、志多見沢・堤が沢・大深沢・宮沢・松の木沢などがそうです。流れる沢の水を溜めての利用は変わらず、今は胆沢川の水を上げ堰を造って深い川になって流れています。

堤の土手



堤尻川の水車



堤尻川にも、川の流れを利用した動力として水車がありました。昔の人は「タッピ」といい、タービンの略と思われます。平成15年（2003）の河川改修工事まで水車を支える土台がありましたが、工事の時破壊され、残念ながらその姿は完全に消えました。

（注：この写真は、別の場所のものです）

堰止めと水田跡

昔の水田跡と思われるものが4ヶ所ばかり見えました。昔の水田はとても小さくて、畳を敷くと隠れるくらいでした。その水田を守るように、川上には小さな土手がもう一つありました。この付近には、今でも豊富な湧き水が流れていますが、やはり河川改修工事を機に姿が変わり、もう昔の面影はありません。またここには、夏に子どもたちが歓声を上げて泳いだ堰止めプールがあり、川遊びの絶好の場所でもありました。



川沿いの貴重な植物

シラカシはドンダリの仲間、冬でも葉が落ちない常緑広葉樹です。福島県・新潟県以西の本州、四国、九州に自生分布するというのが一般的であり、その後の調査で、宮城県石巻市が北限とされてきました。が、堤尻川にも自生していることが近年わかりました。鳥などに種子が運ばれたものと思われるが、元気に育ったのは地球温暖化が進んだ為でしょうか？他にも堤尻川には数少なくなった植物が見られます。



水沢南中学校への通学路と村境の景色

堤尻川を越える道は少なく橋もありませんでしたので、通学には回り道をしていました。昔の人は、沢を下って登る「越え道（こえどう）」という石を並べた道があったと言います。真城村と小山村の境となる上野地区は、昔はほとんどが森で、山菜やキノコなどが取れる豊かな土地でしたが、終戦後に本格的な開拓がなされました。



「塚」の跡

ここは地名「塚」の由来と思われる多くの塚があったところで、南中学校の校門付近や校庭の東には大きな塚がありました。現存する大檀の境塚はバラ線で保護されています。

塚は、通常村境にある藩境塚や、道の距離がわかる一里塚などで、秋成地区には、市指定の史跡として一里塚があります。塚にはその他に大切なものを埋めるなど、墳墓としての役割もあります。ですが今は形もなくなり、真実のほどはわかりません。



たくさんの土器と堅穴住居跡

段丘先端の前沢から続くこの付近一帯は、昔から人々が住んでいた土地で、土器・石器の出土も多く、畑を掘ると容易に破片等が見つけれられました。

真城が丘団地の造成工事の際には、縄文時代の住居跡や、さらに奈良・平安時代にわたるたくさんの住居跡が発掘されました。平成4年にも、平安時代の住居跡が発掘されたという水沢市埋蔵文化調査センターの発掘調査報告書があります。

大檀の墳塚



胆沢の英雄「アテルイ」が「エゾ＝エミシ」と言われたこの地で、攻め入る朝廷軍と戦った時に、たくさんの死者が出ました。「真浄上人」と言うお坊さんがその時死者を埋葬したのですが、そのあまりにもおびただしい死人の数で、埋葬した壇が段々に上になり、それが大檀という地名になったと言われています。この墳塚は墓地の土盛りでしょうか？たくさんあります。アテルイが巢伏村で戦ったとの記録は、延暦八年（789）とあります。昔の道路（街道）が段丘の先端のこのあたりを通っていましたので、おそらく真城も戦場となったのでしょうか。

湧き水井戸

ここ一帯の各家には湧き水の井戸があります。各散策コース沿いにも、こんこんと流れる冷たい湧き水があるのです。

扇状地として、全国にも珍しい段丘の景観を残す真城はすばらしい！特にも、天気の良い日の夕暮れ時の、黒石付近から眺める胆沢扇状地の景色は絶景です。

なお、一関市にある北上川交流プラザ「あいぽーと」には、空から見た胆沢扇状地を見ることが出来ます。



立木八幡神社



この神社は昔、泉沢館というお寺で別の場所がありました。江戸時代に、この地を治めることになった伊達藩が調べさせたものに「安永風土記」と言う記録誌があり、その中に「泉沢寺跡はわからないが、上の杉林の中に移動されて八幡神社になっている」とあります。八幡太郎義家を奉って八幡様になった神社ですが、平泉の藤原氏を攻撃する源頼朝は、再び真城で戦いを繰り広げ、その時八幡様も焼いてしまいました。

明治時代になって八幡様は、村社となって人々の信仰を集めました。

真城の中でもこの地は、昔三度も大きな戦いの場所になったと記録に残っています。

立木八幡神社の銀銭清水

アテルイの戦いから三百年近く経過した康平元年六月（1058）、奥六郡を支配する安倍一族に対し、朝廷は源義家（八幡太郎義家）をも派遣しました。義家は安倍貞任を追って真城にきました。時は夏の盛り、そのあまりの暑さに兵士たちは喉が渇いて動けなくなりました。その時、義家が源一族の神である磐清水八幡に願いをかけ、弓はずを地に刺した途端、なんと清水が湧き出したのです。その清水のお陰で兵士たちは元気を取り戻しました。清水にはキラキラと黄金が混じていたことから、「銀銭清水」と名づけられました。



石碑にはいろいろなものがあります。願いを叶えた感謝の石碑や、写真のない時代には記念の碑、そして苦しい時代を過ごした供養の碑、さらに人々の労働を支え、一緒に働き死んでいった馬に感謝する馬頭観音もあります。

そしてこの地域にも、「雷神」の地名の由来となる石碑があります。昔の人は、雷が落ちて怖い思いをした所に雷神碑の石碑や祠を建てたのです。

この石碑は、元からここにあったものではありません。元の位置はわかりませんが、国道工事の時に移動されたと言われていいます。羽黒山などを含め、奥州を巡り修業したと思われる人々が建てたのか「野州那須郡桜田村（今の栃木県）・小原与兵衛」と刻まれています。

今また西国巡り（四国八十八ヶ所巡り）がブームになっていますが、奥州の人々は出羽三山のほか、お伊勢参りや西国巡りが、命をかけた信仰と観光の最大の旅行でした。

立木八幡神社の石碑



